

アトモスフィア

芸術と科学の真贋

湯 元 昇*

長年タンパク質を研究対象としていますが、Protein がギリシャ語の「最も大切なもの」に由来することを最近知りました。私にとってもう一つ大切なものとして絵画を中心とした芸術がありますが、ここで少し芸術と科学の類似性について書いてみたいと思います。

美術史家の宮下規久朗氏は、「美術史学にとっては、(中略) 視覚的な資料を客観的な言葉に置き換えることがもっとも大事である。」と書かれています¹が、「美術史学」を「生化学」に、「視覚的な資料」を「生物現象」に簡単に置き換えることができます。宮下氏の本には、心が洗われるような感動的な宗教画を描いたカラヴァッジオやラ・トゥールがとんでも無い人物であったことや、ティツィアーノのようなイタリア絵画の巨匠が驚くほど現実的で政治的であったことを示すエピソードが多く書かれていますが、重要な研究をした科学者でもそのような話は良くきくように思います。

また宮下氏は、「真贋鑑定の際に、「これは真筆だ」とか「これはちがう」と最終的に判断するときの理由も、決して言葉にならない「何か」である。(中略) 百万言を費やしても、その「何か」は正確に記述できないだろう。」とも書かれています¹が、これも科学研究に当てはまるように思います。採用人事、論文や申請書の審査、組織評価などの場合に、「本物」かどうか(いわゆる研究ミスコンダクトの偽物と疑うということだけでなく)判断するような場面がありますが、決して言葉にならない「何か」によって判断しているように思います。自分の専門と異なる分野の審査・評価に臨むと最初は不安ですが、その分野の専門家もほぼ同じような評価をされているのを知り、安心する場合があります。その場合、共通した「何か」をもとに判断していると思われます。その「何か」を客観的にするために、研究成果の審査等では、論文数、引用数、インパクトファクター、特許数等の数値が導入されてきています。引用数をもとにしたノーベル賞予想なども一定の説得力を持っていますが、やはり数値だけでは判断できないように思います。

そこで思い出したのが、高校時代に雑誌で読んだ短編小説です。それは、芸術作品がある一定の感動荷を帯びているので、それを測定するオー・メーターをつくったという話²です。つまり芸術作品を見たときに「オー」という感嘆を数値化するというものです。オー・メーターは最初、芸術の真贋を調べるために使われたのですが、次第に人々が芸術の「オー」値だけに興味をもつようになり、さらに、高い「オー」値を体験させる薬が発明され、ついには文明が滅びたというような内容です。数値を絶対視することの危うさに警鐘をならした作品ですが、研究成果の数値化も同様ではないかと思えます。

私は早くから引用数やインパクトファクターに注目し、その有効性も理解しているつもりですが、数値だけに頼らず、「本物」を見極められる目を是非養いたいと考えています。

¹宮下規久朗(2010)「裏側からみた美術史」(日本経済新聞出版社)

²ウラドレン・F・バフノフ, 『『オー!』にご注意』, 現代ソビエトSF短篇集3アトランティス創造(早川書房1974年発行)に収録(筆者の約40年前の曖昧な記憶をもとに本書を探して頂いた早川書房に、この場をおかりして感謝いたします)